

長谷川先生の語りの魅力 ——長谷川まゆ帆先生を送る——

井 坂 理 穂

長谷川先生についての思い出はあまりにたくさんあるので、どこから書き始めたものか、あれこれ迷っている。様々な場面を思い返しているうちに、改めて気づいたのだが、研究に関することでも、授業に関することでも、日々の生活に関することでも、先生はいつも何か新しいことを発見し、それを心から楽しまれる能力を人一倍もっていらっしゃるように思う。長谷川先生が顔をぱあっと明るくされて、「これがもう、めっちゃくちゃおもしろくて……」と話される様子や、そうしたときの内面の「わくわく感」が表に滲み出てくるような口調が、今、思い出のなかで次々に蘇ってくる。

長谷川先生と私の研究室は同じ建物の同じフロアにあり、コロナ禍以前は、研究室、廊下、コピー室などでお話しする機会が日常的にあった。そんなときにはお互いに、執筆中の論文や読んでいる史料の話から、授業や会議のこと、家族のこと、ネコ、ピアノ、鍼灸院、お料理のレシピにいたるまで、ありとあらゆることについておしゃべりした。先生はいつもふんわりとしたあたたかな雰囲気を漂わせていて、ごくたまに「あの仕事は本当にたいへんで、疲れました」と、首を斜め下に傾けながら話されるときもあったが、次にお会いしたときにはまた、「実は今、××にはまっていてね、これがまたおもしろいのなんのって」と、手をひらひらとさせながら、新たに見つけられた「わくわく」することについて語ってくださるのだった。こうしたお話をうかがったあとは、先生の前向きのパワーが、駒場のスピードについていけずにしばしば電池切れしてしまう私のなかに、少しだけ注入されたような気がした。先生には最初にお会いしてから今にいたるまでの20年余り、いろいろな面で助けていただいたのだが、実はこうした日常的な会話もまた、私にとって大きな励みになっていたことを、今改めて感じている。駒場のなかには私と同じように、先生の「わくわく感」あふれる語りを聞いているうちに、自分自身もなんととはなしに元気がでてきた経験をもつ教職員や学生が、数多くいるに違いない。

先生の好奇心の強さや、発見を楽しまれる様子は、ご著書や論文のなかにも様々なかたちで現れている。先生はフランス近世史の分野で、身体やジェンダーにかかわるテーマを中心に、数多くの著作を発表されてきた。視点のユニークさや分析の鋭さ、そして読者を意識した読みやすい文体が特徴的なそれらの著作は、研究対象とする地域や時代を異にする私にとっても魅力的だった。また、同じ歴史学を扱う者としては、先生が研

究対象とどのように出会い、いかにその対象に迫っていくのかという探究の過程自体も興味深く、試行錯誤の詳細までもが著作のなかに書き込まれているところにも強く惹かれた。多彩な史料に、歴史人類学やフランス史の研究蓄積を踏まえた手法で切り込んでいく様子はダイナミックで、その文章からは著者自身の興奮が伝わってくる。たとえば『お産椅子への旅 ものとな身の歴史人類学』（岩波書店、2004年）は、アルザス博物館における先生とお産椅子との出会いをきっかけとした研究をもとにしており、そもそもの着眼点がおもしろい。同書は16～19世紀にヨーロッパで広く用いられていたお産椅子をめぐる探究を通じて、「もの」が人間に働きかけ、人間のあり方を変化させていくありさまを描き出している。「ですます」調の柔らかな文体で書かれた『お産椅子への旅』は、広範な読者を獲得し、新聞やテレビでも話題になった。門外漢にもわかるだろうか、と恐る恐るページを開いた私も、写真や絵を交えながら語られるお産椅子の多様性とその歴史、そこからみえてくることの多さに驚嘆しながら、あっという間に読み終えてしまったのを思い出す。

この続編ともいえる『さしのべる手 近代産科医の誕生とその時代』（岩波書店、2011年）では、お産椅子の利用に反対した外科医モケ・ド・ラ・モットに焦点が当てられ、同じく「ですます」朝の語りかけのような文体で、17世紀末から18世紀初頭のフランス社会と近代産科医の誕生の過程が明らかにされている。身体、出産のテーマは、今から3年前に出された『近世フランスの法と身体 教区の女たちが産婆を選ぶ』（東京大学出版会、2018年）でも扱われている。1780年代初めにアルザス南部で起きた助産婦をめぐる係争事件に焦点を当てた、ミクロストリアの手法をとるこの研究は、実は先生が大学院生のころに遭遇した紙文書を出発点としている。係争事件にまつわる謎をひとつひとつ解き明かしていくなかで、近世フランス社会の大きな流れのなかにこの事件が位置づけられていく様子には、まさに長谷川先生の歴史研究ならではの醍醐味が感じられる。先生ご自身が「あとがき」で書かれているように、同書は「幾重ものバイパスを見だし、あれこれの補助線を引いて、一見ばらばらに生起していたかのように見える諸事象の間を架橋しながら、その都度大きく旋回しては守備範囲を広げてきた」（389頁）という、先生の長年にわたる研究の「ひとつのゴール」であった。

これらのほかにも、先生は数多くの著作を発表されている。授業や学内行政、ご家庭のこともこなしつつ、どのように時間とエネルギーを確保されていたのだろう、とよく思う。紙面が許せば、『女と男と子どもの近代』（山川出版社、2007年）や、先生が中心になって進められたナタリー・Z・デーヴィスの著作の翻訳（『境界を生きた女たち』平凡社、2001年、北原恵・坂本宏との共訳）、オーラルとエクリをめぐる最近のご論考などについても触れたいところである。歴史学会が授業教材としてまとめた『史科学入門』（岩波書店、2006年）や『歴史学の思考法』（岩波書店、2020年）のなかで先生が書かれた章を読んだときにも、「うまいなあ」と思わずうなってしまった。先生のこうした

精力的な研究活動や魅力的な語りの背景には、やはりあの好奇心や「わくわく感」、それに由来するところの「若さ」があるに違いない、と確信している。

先生のそうしたエネルギーは教育活動においても発揮されていて、授業や論文指導で学生と対話しているとき、学生の研究について話するとき、先生はいつもにこにこしていらした。学生に対するきめ細やかな心遣いがいたるところにみられ、そんな先生のもとで、優れた卒業論文、修士論文、博士論文が次々と生み出されていった。学部生向けのリレー講義で一緒にすることも何度かあったが、密度の濃い内容はもとより、レジュメやパワポの美しさにも驚かされた。先生は、おもしろいことを見つけて楽しむ力ばかりでなく、おもしろいと思われたことを広く伝えようとするお気持ちを、人一倍強くおもちであるように思う。効果的に伝達するための新しい技術を取り入れるのにも積極的で、「やってみたら、簡単だし、すごくいいのよ～」などとおっしゃりながら、次々にPC関連の技術を習得されていた（ちなみに先生はご自身のウェブサイトもつくられており、そこには授業内容や出版物の紹介、「最近の独り言」などが載せられている）。

長谷川先生との思い出は、まだまだいろいろとある。ご自宅で手料理をごちそうになったときのことや、歴史学部会で出かけた国内旅行のこと、春の恒例のお花見パーティなども思い出深い（先生はこうした企画もとてもお上手だった）。だがここでは、2013年に南インド出張で一緒にしたときのことに触れたい。チェンナイとプドゥチェーリ（ボンディシェリー、かつてのフランス領）の研究機関、宗教施設、出版社などを回ったこの旅は、私がかかなりハードなスケジュールを組んでしまったこともあり、お疲れにならないかと出発前は少し心配していた。ところがいざ旅が始まってみると、先生は見るもの、聞くもの、食べるもの、すべてを思いきり楽しんでおられて、燦々と降り注ぐ太陽の光のもとで、いつも以上にお若くみえた。ときには「すごい」「すばらしい」「ひゃ～」などと驚きの声をあげながら、好奇心いっぱいの表情で次々に質問してくださるので、私もうれしくなって朝から晩までしゃべり続けていたような気がする。先生はとりわけ、女性たちの衣服、布の色遣いや文様に強い印象をもたれたようで、帰国後には、インドとのかかわりに焦点を当てた近世フランスの捺染工場をめぐる論文も書かれていた（このあたりもさすがである）。それからしばらくして先生のご自宅を訪ねたときには、プドゥチェーリの研究機関で入手されたフランス語の文献とともに、インド滞在中に購入された布や絵が部屋のなかにさりげなく入り込んでいた。

駒場で20余年の月日を共有した先生が、3月末をもってキャンパスを去られるというのはなかなか実感がわかないし、本当にいらっしゃらなくなるのだと想像すると心細くなる。4月以降も引き続き、学内外でお会いできる機会があることを心から願っている。長年にわたり、駒場の研究・教育活動、学内行政においてご尽力、ご指導くださったこと、そして、私をはじめ多くの「後輩」を励まし、助けてくださったことに、改めて深い感謝の気持ちをお伝えするとともに、今後のますますのご活躍をお祈りしたい。